九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

田村俊子の文学作品における死のモチーフ : 女性の肺病死を中心に

蘭, 蘭
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/1456044

出版情報 : Comparatio. 17, pp.24-39, 2013-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン :
権利関係 :

田村俊子の文学作品における「死」のモチーフ
——女性の肺病死を中心に——

蘭　蘭

はじめに

日本近代文学において、フェミニストの先駆者の一人と位置づけられている田村俊子の作品には、「死」のモチーフが頻繁に用いられている。デビュー作品「露分衣」(『文藝倶楽部』明治三十六年)から、初期作品群、作家としての最盛期であった大正期に創作した作品群、及び最後の作品「カリホルニア物語」(『中央公論』昭和十三年七月)に至るまで、特に、ヒロインたちが、いよいよ幸福を迎える直前に自然な病死(殆ど肺病死)の運命に遭遇するパターンや、自由に恋愛を成就することのできない女性たちが、自殺という形で当時の社会制度に反抗しているパターンが多く見られるのである。

人物が肺結核にかかる文学作品は洋の東西を問わず多く、例えば杜甫「返照」、曹雪芹・高顎「紅楼夢」、バルザック「あら皮」、デユマ「椿姫」、ユゴー「レ・ミゼラブル」、モーパッサン「水の上」、ブロンテ「嵐が丘」、ハウプトマン「織工」、シュニッツラー「死」、等がある(注一)。人物の肺結核による死は、どのような意味合いを持ち得るだろうか。本論では、日本近代文学における肺結核文学の嚆矢とされる広津柳浪の「残菊」、徳富蘆花の「不如帰」などとも対比させながら、田村俊子の主人公の肺病死の意味を検討したい。

一、明治以後の日本における結核を扱った文学作品

明治維新以降の文明開化の時代に、西洋から輸入された思想や文学作品或は現実社会の状況から影響を受けたと思われる日本において、日本の近代文学において、結核を扱った初期の文学作品の一例は、広津柳浪の『残菊』(『新著百種』第六号　明治二十二年)である。

幼くして父を失ったお香は、母とともに上京し、しかるべき教育を受けた後、従兄・小太郎と結婚する。そして妊娠するが、卒業成績抜群の夫は洋行してしまい、留守の間に娘・お蝶を出産する。が、まもなく肺結核に襲われて、病状の悪化に苦しみながら夫の帰国をひたすら待つ。ほとんど臨終という時に気がつくと夫が帰ってくる。

『残菊』発表後まもなく、『女学雑誌』(明治二十二年一月)において内田魯庵が「柳浪子の『残菊』」で次のように述べている。

死は誰人も経験せざる所にて如何なる想像家ありとも其万一をだに知るを難んずるに、柳浪子と云へる悟道の達識が虚心平気に写し了りたる其脳力其筆才は誰かよく及ぶべき。日本小説道初まつて以来死の瞬間を描写したるものよもや此外にあるべしとも思はず。

即ち、柳浪は、誰も経験したことのない死の瞬間の描写が大変優れており、それ迄の小説には例がないものとしている。

それでは、肺結核にかかったヒロイン・お香は、どのような苦しみを経て、死を迎えているのかをみてみよう。まず、最初の喀血の場面は次のようになっている。

私はハツと思つて脇にあるハンカチを取うと、手を伸して身體が動くと、二つ三つの輕い咳嗽――何だか咽喉がムヅ癢く覺へたので、ハヘッと一つ絞る途端に……あら血――鮮紅な一塊の血が、私の口から……藥を拭ふとした母の手は二月の花。

オ、血が……。

拭ふ手も忘れて、母は私の顔を見詰ます。私の其時の顔――後に母から聞けば――色は蒼白く、そして唇はわなゝいて、母を見上た眼は、如何にも力なさゝうにうるんで、其内に何となく凄味を帶て居たさうです。（注二）

お香はやがて自分の病気が肺結核であると知る。「あの結核……いよいよ不治ぬと極つた肺結核であつたか。私の生聞な想像が、不幸にも的中た身の不幸」と考えるお香は、ますます苦しむ。

今度は火の玉呑だ様な寒熱の苦しむ。（中略）下女に漱水取らせて寐たまゝの楊枝遣ひ、口中の清めも大方は濟で今舌の奥の方を……ムカリツとした途端に、ゴロツと吐いたは三四口に……耳盥一杯の血――それは驚ひた眼の迷ひ、落付て見れば一合餘りの鮮血。（中略）私の病気は日増に悪くなつて、十月の中旬には、衰弱したのも一倍です。人に尋ねずとも手で撫まはせば、高くなつた頰骨、陥落だ眼、鏡に照すよりも猶明瞭に見られます。（注三）

熱と喀血に苦しむお香は、次第に衰弱していき、かろうじて麝香という興奮剤で意識を保つばかりとなる。「私もいよいよ――今をも知らず――死ぬのであらう」と考えるまもなく、やがて死を迎える。

身は今眞黒な穴の中に――其心細さ！其凄さ！　シーンとして落て行く……あゝ、何所に行くのか……奈落とは此處？……死んで行のゝ苦しさ――譬へるものが世にあらうぞ。（注四）

妻で、母である『残菊』のお香は、もともと幸福な家庭生活を楽しんでいたが、不治の肺結核にかかり、死にいたろうとする苦しみをなめる。小説の終盤において、一度奈落の底に落ちたと思うや、また一度意識を取り戻す。

私の名を呼のは何人……今其處に……今……あゝあの火……迄……其處に……今……も……もちつと……も……今……オヽ、嬉しい……。辛く火の傍に達けば、今迄の苦しさ、凄さ、心細さは何處へやら、気も晴々と今夜が明たかと思ふばかり。気がつけばあら、良人の顔――お蝶も其膝に……。

お香、気がついたか、今歸朝た。（注五）

一瞬の蘇生の後、「気に掛つた髪置、二人列んで祝ふたお蝶の、七歳の紐解ももう今年」という所で物語は終ってしまうのである。

ヒロインの肺結核により死にいたる苦しみを主眼として書かれた『残菊』発表後の十年後の明治三十二年に徳富蘆花の『不如帰』（『国民新聞』明治三十一年十一・二九～三十二年五・二四）が刊行された。

海軍少尉男爵の川島武男と陸軍中将子爵片岡毅の長女である妻浪子は、幸せな新婚生活を送っていたが、浪子は肺結核にかかり、川島家断絶を恐れる姑のお慶によって離縁させられる。武男は人情に訴えて反対したが無力である。日清戦争で負傷した武男に浪子から慰問品が届き、二人の交情は続いたが、病は進む。浪子は逗子の海岸で投身自殺を図るが、婦人に止められて身の上話で励まされ、貰った聖書で安らぎを得る。父との関西旅行中、山科駅ですれ違う列車の武男と顔を合わせたが、今生の別れとなる。「最早婦人なんぞに生まれはしませんよ」の言葉を残して浪子は他界し、墓前で武男と中将は握手をして慰め合う。

「はあ、到頭肺になりましてね」

「肺？――結核？」

「は、ひどく喀血をしましてね、」

（中略）医師が見舞ふ毎に、敢て口には云はねど、其症候の次第に著しくなり来るを認めつゝ、術を尽くして防ぎ止めむとせし甲斐もなく、目にはへねど浪子の病は日に募りて、三月の初旬には、疑ふ可くもあらぬ肺結核の初期に入りぬ。（注六）

浪子が肺結核にかかったことを知って、「浪さんが亡くなれば、僕も生きちゃ居らん！」と武男は浪子への愛を表明する。「死んでも、わたしは良人の妻ですわ！誰が如何したッて、病気したッて、死んだッて、未来の未来後までわたしは良人の妻ですわ！」と浪子も良人への愛に呼応する。しかし、いくら相思相愛の夫婦であっても、封建的な家の考え方によって、夫婦関係は裂かれてしまう。離縁された浪子の病はますます重くなる。

病は見る見る重り、前後も覺へぬまで胸を絞つて心血の紅なるを吐き、醫は黙し、家族は眉を蹙め、自己は旦夕に死を待ちぬ。命は實に一縷に繋ながれしなりき。浪子は喜むで死を待ちぬ。死は却々嬉しかりき。何思ふ間もなく忽ち深井の暗黒に堕ちたる此身は、何の楽あり、何の甲斐ありて、世に永らへむとはす可き。誰を恨み、誰を戀ふ、左る念は形をなす餘裕もなくて、唯身を繞る暗黒の恐ろしく厭はしく、早く此裡を脱れむと思ふのみ。死は實に唯一の活路なりけり。浪子は死を待ち詫びぬ。身は病の床に苦み、心は已に世の外に飛びき。（注七）

意識がはっきりせず、頻りに血を吐き、死を待つ浪子は、死が自分の不幸に対する唯一の活路と考える。こうして浪子は、一度海辺で自殺を試みるが、或る婦人に助けられる。助かった浪子は

一時的に恢復するが、旅行に出て帰ってから、また危篤状態に陥る。

二年に近き病に、瘠せ果てし身は更に瘠せて、肉と云ふ肉は落ち、骨と云ふ骨は露はれ、蒼白き面のいとゞ透き徹りて、唯黒髪のみ昔ながらに艶々と照れるを、長く組みて枕上に垂らしたり。(中略)忽ち色なき頬のあたり紅をさし来たり、胸は波うち、燃ばかり熱き涙ははらはらと苦しき息をつき、「あゝ辛い！辛い！最早――最早婦人なんぞに――生れはしませんよ。――苦しい！」(中略)浪子は口を閉ぢ、眼を閉ぢ、死の影は次第に其面を掩はむとす。(中略)幽かなる微咲の唇に上ると見れば、見る見る瞼は閉ぢて、眠るが如く息絶へぬ。(中略)さし入る月は蒼白き面を照らして、微咲は猶唇に浮べり。それど浪子は永く眠れるなり。(注八)

唯一の活路とする死がやっと浪子を訪れる。この二年間、浪子を苦しめるのは、病魔のみではなく、愛する人と一緒に居られない辛さである。臨終の「あゝ辛い！辛い！最早――最早婦人なんぞに――生れはしませんよ。――苦しい！」の叫びは、幼い日に実母を失い、継母に虐待され、嫁いでは姑にいびられ、やっと手に入れた武男との幸福もはかなく、胸を病んだだけで離縁されるヒロイン・浪子の叫びのみを表現したものではない。小説の中で、洋行から帰った伯爵に嫁ぎ、姑の気に入るが、良人に嫌われ、子供を一人もうけ、良人に浮気され、離婚した浪子の旧友が、病死することが描き出される。浪子の叫びは、封建的な男性中心的社会における女性たち一般の叫びを象徴したものであるといえよう。

広津柳浪の『残菊』と徳富蘆花の『不如帰』には、同じ肺結核により、死を迎える若い女性像が描かれている。『残菊』は、ヒロイン・お香の発病後の苦悶のリアリスティックな描写に重点を置いている。『不如帰』では、ヒロイン・浪子が病魔に苦しみつつ、同時に封建的な家制度にも苦しむ描写に重点を置いている。

紅葉の『金色夜叉』と並ぶ明治期のベストセラー小説『不如帰』は、文壇のみならず、劇界、歌舞伎界でも公演された。小松良夫の調査によると、「明治三十四年二月、大阪朝日座で初演があり、大好評で大入りであり、『不如帰』は注目された。明治三十六年東京の本郷座で公演される。明治三十七年東京座、三十八年本郷座、新富座、競演されている。その後長く『己が罪』『金色夜叉』『明治一代女』等ともに『不如帰』は新派の十八番となった。また明治期には歌舞伎でも講演された」(注九)。

このように日本において、結核文学の嚆矢である柳浪の『残菊』、蘆花の『不如帰』以後、肺結核を扱う文学作品が、雨後の筍のように次々と現れている。福田眞人の『結核という文化』(注十)によると、永井荷風の『新任知事』(明・三十五)、森鴎外の『仮面』(明・四十二)、『キタ・セクスアリス』(明・四十二)、シュニッツラーの『死』の翻訳『みれん』(明・四十五)、『羽鳥千尋』(明・四十五)、『高瀬舟』(大・五)などがあり、また張建明の「新感覚派文学の描いた結核」(注一一)によると、横光利一の『春は馬車に乗って』(大・十五)、『花園の思想』(昭和・二)、『朦朧とした風』、『担ぎ屋』、『古い女』(昭・三)、『船』、『園』(大・十四)、川

端康成の『白い花』（大・十三）、中河与一の『海に開く窓』（昭・二）、十一谷義三郎の『白樺になる男』（大・十四）、等の作品の中に、肺結核患者の描写が見られる。

このように、日本文学史上において肺結核を扱う作品は多いが、田村俊子の肺結核を扱う作品については従来ほとんど言及されていない。いったい俊子の肺結核を扱う作品群はどのような意味合いを持つのだろうか。以下に詳しく見てみたい。

二、明治期の俊子文学における肺病死に至る女性たち――「露分衣」、「花日記」、「露」、「葛の下風」

『不如帰』は明治三十六年東京の本郷座での初演以来、明治三十七年東京座、三十八年本郷座、新富座で公演されている。女優の経験もある俊子は、小さい時から芝居に親しんでいた。俊子の小説の中に、ヒロインたちが本郷座、新富座に芝居を見に行くシーンが多く描き出されている。明治四十五年二月の『演芸画報』に掲載されている「新富座」は、俊子による劇評である。こうして見ると、俊子文学における肺病死の多用は、盧花の『不如帰』からなんらかの影響を受けた可能性があると言えよう。具体的に作品を見てみたい。

俊子のデビュー作「露分衣」（明・三十六）、「花日記」（注一二）、「露」（注一三）、「葛の下風」（明・三十九）は、専ら女主人公が肺結核で死ぬ物語である。中でも、「露分衣」と「葛の下風」の二作のヒロインたちは、盧花の『不如帰』における封建的な家制度に苦しむ明治社会の女性たちを彷彿させる。

「露分衣」の冒頭では、

庭の桜、盛りなりし頃は病重りに重りて、此世の最期と何事も思ひ諦めは断念ながら、風強き夕べ、硝子越しの花の美しさも、別れの一ト目かと悲しく、誘はゞ共にと念ぜしものを、片手落なる春の山風や、我は浮き世に残されて、蜘蛛の糸より果敢なき玉の緒の、何處までもと引き儘したる果、弗と切るゝ折りは計られねど、暫しとばかり繋がれつ、彼は空しき遺骸となりたり、と葉隠れに紅色残る桜の梢見上つゝ、お君は其處に佇みぬ。（注一四）

というような、満開の桜と蜘蛛の糸が山風の吹くと共に無くなって行くさまが描写され、危篤状態に陥っているお君の命もいつかこの自然の現象のように風と共に消える、つまり、この世を去るということが暗示されている。

稍反りたる銀杏返し、引き詰めたれば細き面愈細くなりて、長き睫毛の眼元涼しく、透き通る迄に色白きが、唇の色も薄ければ、間狭く濃き眉ばかり鮮やかに、畫きたるやうなり。（注一五）

ここには、病にかかった後のお君の青白い顔と血色のない唇と日に日に窶れていく様子が描かれている。お君は両親を早くに亡くし、兄の正二と小田原に住む伯父が彼女の唯一の肉親である。病気療養の為に小田原で過ごしていたが、桜が満開の時に危篤状態

に陥り、晩春に死の淵からようやく恢復し、根岸の家に戻ってきた。お君の留守中に、兄・正二は春江という妻がいながら、女義太夫語りの蔦之助に心を奪われており、家をよく空け、また、金銭的にも蔦之助に貢いでいることをお君は女中のお杉から聞く。夫に浮気された春江の「結ひ日を二日程遅れし丸髷、崩壊れし儘に繕ひもせず、白き領筋に後れ毛乱れて、痩せに痩せたる肩よりはお納戸縞のお召しの袷に引き掛けたる米澤の羽織脱げ落ちんばかり、乱次になれる着物の裾足に纏はして立てる」という窶れた姿を見たお君は、兄嫁・春江の心の痛みに同情する。

両国に住む春江の母親・お峯は、娘の窶れた姿を見て、彼女に離縁を勧める。それに対して、春江は、「如何程嫌はれても、疎まれても、打たれても、叩かれても、正二の傍に居度いと思ふ真情の、いつかは通ぜずに有ませうや、一生嫌はれ通したとて、しがない境遇に落ち果てましたとて、世を終るまで、共にさへ棲む事の出来まするなら、其で満足と思ふて居ますを、私を不憫とお思ひ成さるなら打捨て置いて下され、離縁の話なぞ弗とも云ひ出して下さるな」という決意を母親・お峯に告げる。そして、お峯の「表面はお治りか知らぬが此後共棲屋根の中に住ふやうでは弱いそなたの身に何時傳染らぬとも限らず」という忠告に対しても、春江は、正二の妹ならば自分の妹も同様であり、お君の病が伝染したとしても本望だと言い放つ。

春江がいくら断固として根岸の家に残っても、母親・お峯は決心が堅く、娘を連れて帰ることを決める。

一旦体調が恢復したお君であったが、兄嫁・春江が連れられて帰るという事を聞いて、また発病してしまう。「疲れたる身を烈しく立振舞たるに、息切みて胸に打つ波高く苦しきを、堪え兼ねてか手に押へ」ながらも、お君は、重病の身を引きずって、兄のいる蔦之助の家に訪ねていく。

お君は、春江の夫の浮気を黙認する心情を兄に伝え、自分の重病に免じて、根岸の家に戻ってほしいと伝える。妹の病を考え、正二は一度帰ることを決める。お君より先に家に帰った正二は、春江と大喧嘩する。離縁すると決意する正二に、春江は（実家に）「戻りまする」と言う。しばらく言葉無く、物音静かで庭の虫の音も聞こえる時、パタと倒れた音が伝わってくる。正二が驚いて見返れば、お君だった。

血汐冷え尽したるかと思はるゝ様なる顔色、バッチリと見張りたる目に据りたる眸、凄まじき姿に立ちたるお君の、一文字に結びたる唇開くか。と見る間にハタリと其處に倒れぬ、裾の邊りより眞白の足の爪先まで夥しう泥に塗れたり。（注一六）

意識が戻ったお君は、「姉様、姉様」と力なく繰り返し、「私が亡くならば跡には骨肉の人と云ふ者は小田原の伯父様ばかり、他には縁者もなき兄様の、今度の事に愛想尽かさず、今迄にも増して仲好くして下され、悉皆と迷ひも覺め、御後悔なされたのなれば、辛くせし事は水に流して、何も恨んで下さるな」と言う。それには答えず、泣いている春江に、お君は最後に「何も寿命で御坐んすを、諦めてもうお泣きなさるな、そのやうに嘆いて若しや

煩ひでもなされたら悪い」と力なく言って窪んでいる眼を閉じる。

「露分衣」においては、お君の病状が兄夫婦の関係の如く悪化して行き、最後に死を迎えるという構造が窺える。小説の終盤では、「一葉散りたる楓に霜置き初めて、果敢なき露を命に、暫し浮世の秋に生存へし虫の音、泣き尽くして次第々々に弱りもて行く」という自然現象が描かれている。初霜が降りると、露の命が終り、秋には元気で鳴いていた虫の音も次第に弱くなってくる。その描写は、お君の命の終りを示唆し、冒頭の自然現象の描写と呼応する。

風と共に落ちた桜、風と共に崩れた蜘蛛の糸、肺病に奪われたお君の命、兄夫婦の結婚の破綻、晩秋が来ると共に凍った露（霜になる）、鳴き声の次第に弱くなってきた虫等は感傷的に表現されている。つまり、「露分衣」は「死」をイメージさせるものに溢れていると言える。

「露分衣」のお君は、幼い頃両親を失くし、兄の正二が父親のような存在であり、兄嫁の春江が母親の存在である。肺の病にかかったお君は、兄が終日家にいないため、母親のような兄嫁に世話されている。しかし、肺病の伝染のことを考えている兄嫁の母・お峯は、お君の唯一の母親のような存在の兄嫁を連れて行く。『不如帰』の浪子も、幼い頃実母を失い、継母に虐待され、嫁いでは姑にいびられ、やっと手に入れた武男との幸福もはかなく、胸を病んだだけで離縁される。「露分衣」のお君と『不如帰』の浪子は、同じく不幸の肺病にかかるのであるが、封建的な家制度が根本的な障害となって、ひとたびは手に入れた家族愛や夫婦愛を喪失するのである。

死の瀬戸際にいる蒼白の美女を不安そうに看護する母親、姉妹、娘、優しい友人といった書き割りは、例えば十九世紀後半の西洋の絵画によく見られる。フランスの画家ルイ・リデルによる一九〇〇年のサロンへの出品作は、このジャンルの典型的な例である（注一七）。「最後の花」と題されたこの作品（画一）は、ゆったりとした服を身にまとった末期的な肺病患者の若い女性が、元気づけてくれる親友の肩に、精根尽き果ててもたれ掛かる姿を描いている。「最後の花」について、ブラム・ダイクストラは次のように解釈を施している。

親友の力強く健康な存在感は、その連れ合いの救いようのない無力感と著しい対照をなしている。健康の女性は、明らかに、友人を湖への最後の遠出に連れ出したのであり、そこは、二人がかつて、奥まった岸辺に沿ってあれほど頻繁にボートを浮かべては、花を摘み、親友同士の当たり障りのない秘密を打ち明け合った場所だったのだ。もう一度、まるで時間の経過と自然のもたらす荒廃を拒もうとでもするかのように、二人は過去へ遡ってお気に入りの場所へ足を向けたのだが、宿命で定められていたとおりに、運命が二人に突然襲いかかった。そのとき摘まれる花のなかには、この最後の花のなかには、花のような女性――すなわち女性の手のなかにある花が湖の静かな水のなかへ間違いなく落ちてゆくのと同様、時の流れのなかには確実に落ちてゆく女性――の命も含まれているのである。（注一八）

ブラム・ダイクストラは「リデルの絵は印象的で、実際のところ、紛れもなく感動的なイメージではあるが、世紀末における他の類似作品と同じく、相も変わらぬ、お決まりの、「自然な」とさえ言ってよい病人としての女性という概念を利用し、それにロマンティックな味付けをしたものである」（注一九）と述べている。

明治期に書かれた「露分衣」にも、青白い顔、血色のない唇のお君が、最期を迎える時に、臥床に寝そべり、夜着の袖に身をなげ伏して泣いている兄嫁・春江に姉様、姉様と力なく言い、泣かないで下さいと力なく窪んだ眼を閉じる場面がある。そのシーンはブラム・ダイクストラの解釈している「最後の花」と類似していると言えるだろう。つまり、桜の花、蜘蛛の糸、露、晩秋の虫等の運命は大自然の時間の経過に伴って終ると同様に、お君の命も時の流れのなかに落ちてゆく。リデルの絵の中の落下する花と同じく、「死」が自然の景物によって象徴されているのである。

アメリカの女性随筆家、アバ・グールド・ウルソンの『アメリカ社会における女性』（一八七三）によれば、病弱な女性は、有閑階級の女性の間で崇拝されるということである（注二〇）。また、ウルソンは、「多くの女性が、肺病を思わせる女性の顔つきは、聖人のような気質を宿している証拠であると考えられていることに気づき、断食することによって肺病病みのような貞淑な顔つきをまとい始めるようになった。女性は至る所で、様々な形の「緩慢な自殺」の趣味を習得した」と述べている（注二一）。ウルソンの指摘によると、十九世紀半ば頃、「肺病的な崇高さ」は、「未発達な体と、青白く締まりのない顔をした、物憂い雰囲気を醸し出す流行のタイプの貴婦人」によって特徴づけられていた。更に、ウルソンは、「死は、女性が生まれながらに奉仕する対象である男性に我身を捧げる窮極の犠牲的行為となった。気高い奴隷状態というこの最後の身振りを男性に対して示さないことは、ある意味では、不服従の、「片意地」の行為であったのだ」と述べている（注二二）。ウルソンの考え方を俊子の作品の解釈に適用することができるとするならば、家父長制、家制度に束縛されている「露分衣」のお君の「死」は、生まれながらに奉仕する対象である男性に我身を捧げる窮極の犠牲的行為を体現していると解釈できないこともないであろう。

まとめて言うと、「露分衣」では、「死」のモチーフの設定によって、明治社会における、ひたすら男性に服従するしかない女性の運命が象徴的に描かれていると言えるのである。そして、逆説的であるが、こうした犠牲的行為が、これらの不幸な女性たちにとって、『不如帰』の浪子のように、「死は實に唯一の活路なりけり」なのであった。

また、「肺病死」という行為で、若い命を夫に捧げた女性たちの代表者の一人は「葛の下風」の芳美である。

芳美は浅香家の養女で、養父は東京府庁の属吏であり、養母は高利貸しを内職にし、彼らの願望は芳美を玉の輿にのせることだったので、財産家である保江との縁談は祝福される。芳美は幸せな結婚生活を送っているが、前妻の子・小枝が自分になつかないことが心配の種である。一方、保江の姉で未婚のゆかこは小枝の

母である保江の前妻・直子が、子供と別れた悲しみの余り衰弱し、危篤状態に陥っている病床に芳美を連れて行く。芳美は自分の幸せは、直子の不幸の上に成り立っていることを知り、直子が小濱家に戻ることを願い、自分は実家に帰る。

實にも芳美は、既病める人のやうにて、今日一と日の苦悩に面は窶れ眼は落ちて、蒼き頬をば伝ひても拭はぬ涙の痕、白う輝きて凄く、丸髷の恰好美しければこそ。濡れし衣服の、薄きを透して唯しめやかに、身内わなわなと震えるなり。

其の夜より芳美は熱烈しく發で、、明日は臥床に枕も上らざりき。

（中略）別れなばこの後の寂しさは如何あるべきなど云ふ其れは明かしても見度き思ひのみ迫り来て、胸の切なさ、熟睡まぬ昨夜よりの身の病ひの苦しさに、芳美は疲れ果てし身を悶掻きて自ら掻い抱きしが、名残なく晴れ渡りし夕空の、珊瑚樹の高きを染めし強き夕陽に涙枯れたる眼をきらりと射られて、

「あ、」

と小さう叫びしと思ふ程もなく、眩きたる身は埒もなく保江の膝に仆れかゝりて、一としきり、物に堪ふる力失せたる心の魂、その儘消えて、絶え入りて、芳美は果敢なく眼を瞑ぢつ。（注二三）

実家に帰った芳美は、泣きに泣いて、窶れた顔に眼も窪んでいる。彼女は、苦しみのあげく病気（肺病）にかかり、命までを失ってしまう。

養女としての芳美は、封建的な家制度に従い、養父母の望んだ通りに、財産家である保江と結婚して幸福な婚姻生活を送っている。しかし、財産家の家に嫁いだ芳美は、夫の前妻の子に親しまれず、夫の姉に嫌われ、自分の幸福が他人の不幸の上に成り立っていることを知っていた。芳美は、夫と相思相愛であっても、周囲の人間との仲が気になり、苦しんでいる。愛する夫と一緒に居られない女性・芳美にとって、「死」という犠牲的な行為は彼女の唯一の「活路」といえよう。物語の展開によって暗示されるものに重きを置いて解釈するならば、封建的な家制度に苦しめられている女性たち、即ち『不如帰』の浪子、「露分衣」のお君、「葛の下風」の芳美は、女性の社会的地位が認められていない明治社会において現実の事態の打開が不可能となった時に、肺病死という運命によって象徴的に一種の救済が行われているのだと解釈することができる。

三、大正期の俊子文学における「肺病死」に遭遇する女性たち——「暗い空」、「命」

大正時代の俊子の小説においても、同じように「死」の運命に遭遇する人物が描かれるが、小説における「死」の意味合いは明治時代の俊子の小説における場合とはやや異なっている。

大正三年四月から同年の八月まで『読売新聞』に連載された長編小説「暗い空」は、文学の道で生き通したいという夢を抱いている女主人公・栄が、貧窮した家族を支えていく過程で、夢と現実の狭間で追い詰められて行くストーリーである。俊子の出世作

「あきらめ」と同様、「暗い空」では、様々な女性の生き方が描かれている。主人公・栄の妹の咲子は、封建的な家制度のもとでの伝統的な女性の生き方に甘んじるのではなく、看護婦の仕事に従事して社会に関与したいと考えている。

咲子は狂人の看護婦になって一生を終りたいと云ふことを考へ初めてから看護婦志願を云ひ出したがそれは姉に遮られてしまつた。その次には、盲目や唖の教育を専門に研究して見たいと云ふ目的を持つたり、貧困な子供の教育に従事することを理想にして見たり、其れにはもつと確實な教義を自身の知識に與へる必要の為に宗教の学校に入つて見やうとしたりした。咲子には社会の犠牲になつて生涯を働くことが、人間のいちばん美しい仕事だと考へられた。自分の生活はそれより他にないと咲子は固く決心してゐた。（注二四）

将来は世の中の障碍者たちに身を捧げようとしていた咲子であるが、姉の栄の薦めに従い、音楽学校の師範科に入る。咲子は、音楽学校を出て、友人から紹介されて家庭教師をする。十三歳の女の子は、かつて庭の泉水に落ちて白痴になってしまったが、音楽の才分はまだ消えていない。その子の家庭教師になった咲子は、「殆ど理想の世界に突き當つたやうな歓びに興奮した。職業の性質から云つても小学校の唱歌の教師などよりは、どんなに高尚で、どんなに献身的で、どんなに精神的だか知れないと思つた。私の一生の力でその子に立派な音楽の才能を発揮させてやりたい」と考えている。

いよいよ自分の思った通りに理想を叶えようとしていた咲子は、家庭教師を始めるとまもなく、もともと弱い体が肺病にかかる。咲子の母は三十四歳の後厄で肺炎によって亡くなっている。また同じ不幸が、一生献身的に世の中に貢献しようと思っている若い咲子の身を訪れる。家に帰ってきた咲子の病気はますます重くなる。

妹は青い顔をしてゐた。頬の肉の落ちた顔に、薄くつけた白粉が気味悪く骨立つた顔面に微弱れて、窪んだ瞼のうえから、衰弱した身體のすべての力を支へてゐる眼が大きくぽかんと光つてゐた。（中略）妹は薄く白眼を見せて、唇を僅かに開けて、そこから時々困難な呼吸を漏らしてゐた。（注二五）

咲子の死人のような様子から、死の間近いことを予測した栄は、「もうこれ限りで、妹とは永久に言葉を交はす折が失くなつてゆくやうな、悲しい運命が目前に迫つて思はれた。自分にはたつた一人の妹なのである。この全世界に生れ出る無限無数な人間の霊魂の中から、この二人だけが、一とつ赤い糸につながれてゐるのである」と考える。

デビュー前の俊子もまた、妹・茂子が肺病で夭折するという不幸に遭遇した。妹について俊子は次のように追憶している。

長らく病床にありし妹は遂に先月二十二日の夜半この世を去り申

候日數經る程夢より覚めしやうにてたしかに冷やたる頰も撫でたり、棺へおさむる時變り果てたる面も見たり、煙りとなりて残りたる哀れの姿も見たること、幾度思ひ返し思ひ直すにて候へど、いかにしても失せたりとは思はれず今にも何處よりか歸り来るやうに思はれ候。

兎ても角ても短命に生れ出でしものなれば一昨年の春よりけふまで二年余り漸う生存へしをせめての心やりにして思あきらめよと人々は伸候へど、始めより短命と定まりてありしものならば何故に人の子、人の妹となりて一時なりともこの世には出で来しと口惜しく、世には數多き兄弟持てる人の一人も缺くる事なくて終るも候ふにいかなる罪ありとてか撰りに選りて唯二人の姉妹のうち片々を奪ひゆきしにやと恨めしく、ましてあのやうなる少さきものをと情けなくも思はれ候、人世などてさらぬ別れのさだめあるにて候ふにや、唯何事も果敢なく候、母と二人して記念の品を集め候ふ時、拙者とてそしりたる習字の清書、繪なと残りたるを今見れば誰よりも勝れて書なれしやうに思はれて賞めてやらざりしが口惜しく、挿し古したる簪にも一度も簪さゞりし花にも、それぞれの哀れこもりて限りなき悲しさを覚え候ひき、父も母も誰もまだ踏み見ぬ冥路へ何故一人して旅立ちしかと愚痴ながらそれのみ繰り返され候。（注二六）

ここには、妹・茂子の短命に対する嘆き、誰よりも勝れていた習字の清書や一度も使ったことのない簪を整理する時の哀惜の心情が述べられている。その無念の思いは「暗い空」のヒロイン・栄の妹・咲子に対する思いと重なるようである。二人はいずれも、肺病により、「死」の運命に遭遇する。

咲子が肺病になった時に、かつて母の死後、台湾へ事業を起こしに出かけていた父が日本に帰ってくる。咲子は短い間ではあるが、酒癖悪い父から愛情を受ける。しかし、我がままの父は、娘の病気を考えず、一言も残さずに、台湾に残してきた新たな妻子の元に帰って行く。哀れな咲子は、自分の命の最期を迎える時に、もう一度父に会いたいという願望を叶えることができない。また、伯母は咲子のことを「生きながらの骸骨」と思っており、「この家の空気のなかに五分間でも身体を浸しておくことが厭だから、非常な事の起ってこない限りはお前たちのところへは足を入れたくない。その代りどんな事でも云ってよこせば直ぐに應じて上げる」という伯母からの手紙を読んだ咲子は伯母に会うことも断念してしまう（注二七）。

「暗い空」の咲子は、「露分衣」のお君、「葛の下風」の芳美と同じように、肺病により、死の運命に遭遇する。しかし、お嬢様として設定されているお君や玉の輿に乗る芳美と異なり、咲子の場合は、何らかの形でみずから社会に関与したいという理想を持っている。ここには、明治の女性より、大正の女性の方が一般的に、社会に出て働くという形で自分の主張を表現する傾向が強くなったという現実の反映が窺える（注二八）。

「露分衣」や「葛の下風」と異なり、「暗い空」において物語の前面に出てくるのは、「死」ではなく、妹の死後の悲しみや苦しみを乗り越えて自分の未来の幸福を予感しているヒロイン・栄の描

写である。俊子の明治時代の作品において、「死」はヒロインを支配する存在として物語の中で大きな位置を占めていた。「暗い空」においても、封建的な家制度のもとでの伝統的な女性の生き方を拒否して職業に就こうとした妹・咲子は確かに死んでしまうのであるが、ヒロインである姉・栄が妹の死による悲しみを克服するさまが描写されることによって、死によってすべてが終るわけではなく、死は乗り越えられるべきものであるという考え方が小説内世界に醸成されているように感じられるのである。

封建的な家制度に対する反抗は、「暗い空」の咲子より、「命」の美江において、さらに大胆なものになっている。

大正四年一月の『婦人画報』に掲載された、「二人の世界」は、十八歳の娘・美江が、恋と、恩義ある親族の薦めによって持ち上がった縁談との板挟みに悩む様を描いた短編である。父親を亡くし、祖母や伯父夫婦の世話になりながら、母親の手で育てられた長女・美江は婿を取らなければならない。美江には「何処に行つてゞも二人だけの世界を作る」と約束をした恋人がいたが、見合いを薦められる。縁組みを迫る母親に美江が従順そうに応答しているところで物語は終っている。この「二人の世界」の続編として、同年五月の『婦人画報』に発表された「命」は、美江が母親や親族の意に反して出奔し、恋人・保衛の別荘に、恋人とともに隠れているところから始まっている。

保衛と生活を送っている美江を、ある日、美江の母親が訪れる。母親の「直ぐに私と一所にお歸り」という言葉に対して、美江は、「私は死んでも——死んでも家へは歸られないんです」と言って反抗する。世話になった親戚への恩返しのために、母親が手配した縁組みに対し、美江は、恋人と出奔する方式で反抗するのである。即ち、美江は、封建的な家制度に対して、実際の行動で対抗しているといえる。

美江は、母親の泣き落としにあって仕方なく帰宅したが、死病の床に就いて衰弱しながらも、恋人への気持ちは変わらず、縁談の相手と結婚すればその相手をも欺くことになると言って抵抗を続ける。母親は、娘を男と出奔した「不具同様な捨てもの」と考えるが、不治の病にかかった娘を結局は許すようになる。婚約者のいた恋人・保衛のほうも、自分の父親の反対を押し切って、美江に求婚する。しかし、この時の美江の病気は悪化している。

胸がふさがつて呼吸ばかりが美江には苦しかつた。保衛を見た時のさつきの驚きと、嬉しさとなつかしさとで、美江の胸には今も慟悸がやまなかつた。そうしてだんだんに混迷して行くやうな心持になつて、美江は我知らず蒲団の上に倒れた。（中略）「あなたと結婚のできる身體ではなくなつたのですもの。私はいやな病気になつたのぢないでせうか。」（注二九）

胸がふさがり、呼吸したら苦しくなる、「いやな病気」は、肺病であると推測できる。小説の末尾は、

青葉がだんだんに濃くなつて来た。美江が漸く保衛に連れられて、南の海に向つて旅立つ日が来た。やせ細つた美江の顔に久しぶり

で白いものをつけたその眼と眉が際立ってみんなの眼に美しく見えた。（中略）病後の美江の身體は脆く散ってゆく花片のやうに弱々しく見えた。

美江の命、それは何時まで保つことだらう。（注三〇）

というように、美江の死が避けられないことが読者に伝えられる。死病にかかった美江が恋人を結ばれるにいたることは、封建的な家制度に抵抗しただけでなく、「死」を賭してまで、自我を押し通したことを象徴しているとも解釈できる。

美江の「死」は、イタリア小説家・ダヌンツィオ（一八六三～一九三八）の「死の勝利」（一八九四）を連想させる。『死の勝利』（一八九四）において、男主人公・ジョルジョ・アウリスパは、人妻の女性・イッポリタ・サンツィオと恋に落ちたが、カトリック教国イタリアでは離婚は禁止されているので、二人は法律上、一緒になれない。宗教上のタブーに対して、二人は駆け落ちし、男は、法律的に女性が永遠に他人の妻であることに悩んだあげく、心中を選ぶ。『死の勝利』は、タイトル通り、ジョルジョは、現実の世界ではイッポリタとの夫婦の名分を得られないが、死ぬことによって死の世界で夫婦の名分を実現するという物語であり、個人が国家の制度に勝つことを象徴している。死に方（病死と自殺死）は異なるが、美江とジョルジョ・アウリスパとは、それぞれ求めているものを、「死」という形で手に入れた点が共通している。

封建的な家制度に対して、「命」の美江は、「暗い空」の咲子より、さらに大胆に実際的な行動を取り、その結果、死の運命を免れないとしても、勝利を得るのである。

まとめ

当時の社会状況において、結核は明治期から昭和二〇年頃まで大勢の人々がかかり亡くなってしまうという恐ろしい病であった（注三一）。俊子の周囲にいた作家たちにも肺病で亡くなった例が多く見られる（注三二）。特に、俊子の最初の文学上の手本とした樋口一葉も肺病によって亡くなっている。このように、かつて影響を受けた人や自分の妹等の肺病死を見聞きした俊子の作品に、肺病死のモチーフが頻出するのは理由のないことではないだろう

俊子の作品における肺病死のモチーフの設定は、当時の多くの人たちが肺病にかかったという事実を反映する一方、彼女に先行する作品、特に、盧花の「不如帰」から影響を受けていると考えられる。俊子はしばしば作品において女性を肺病死の運命に遭遇させるが、女性人物たちの死は、男性中心的な社会制度への服従を象徴すると同時に、他方において、逆説的に女性たちの救済が行なわれているのだと言えよう。しかし、デモクラシーの大正に入って、「新しい女」（注三三）が誕生するに伴い、ヒロインたちは、依然として死の運命は免れないとしても、ひたすら運命に服従するのではなく、実際的な行動を取り、社会に関与しようとする。時代の変化に伴って、俊子の作品において、次第に、封建的な家制度の桎梏を逃れる「新しい女」像が浮かび上がってくることが窺える。

注一　岡西順二郎「結核と文学（一）」（『日本胸部臨床』第三一巻第一号、克誠堂出版、一九七二年一月）八一頁。
注二　『明治文学全集、十九、広津柳浪集』（筑摩書房、一九六五年五月）一九〇頁。
注三　同書、一九七頁。
注四　同書、二〇八頁。
注五　同書。
注六　『不如帰』（民有社刊行、一九〇〇年一月）一五〇～一五一頁。
注七　同書、二九四頁。
注八　同書、三六三、三六六、三七〇、三七一頁。
注九　小松良夫「「不如帰」で結核史を区分する」（『医学研究』七三号、医学史研究会出版、一九九八年九月）九頁。
注十　福田眞人『結核という文化史』（中央公論新社出版、二〇〇一年十一月）
注一一　『種智院大学研究紀要』三号（種智院大学出版、二〇〇二年三月）。
注一二「花日記」（『女鑑』明治三十六年九月）は、結婚前に夫が書いた、病死した婚約者の思い出が綴られた日記を妻が盗み読む、入れ子形式の物語である。
注一三　明治三十八年十一月に、『新小説』に発表した「露」も「花日記」と同様に、ヒロイン・愛が自分の幸福な結婚生活を迎える直前に、肺病で死の運命に遭遇する物語である。
注一四　長谷川啓、黒澤亜里子監修『田村俊子全集』第一巻（ゆまに書房、二〇一二年八月）三頁。
注一五　同書。
注一六　同書、二三頁。
注一七　ブラム・ダイクストラ『倒錯の偶像――世紀末幻想としての女性悪』富士川義之等共訳（パピルス出版、一九九四年四月）の第二章「病弱崇拝」（六一頁）を参照。
注一八　同書。
注一九　同書。
注二〇　同書、六四頁。
注二一　同書、六八頁。
注二二　同書、六九頁。
注二三　長谷川啓、黒澤亜里子監修『田村俊子全集』第一巻（ゆまに書房、二〇一二年八月）二八一、二九一、三〇二頁。
注二四　長谷川啓、黒澤亜里子監修『田村俊子全集』第四巻（ゆまに書房、二〇一二年十一月）二七八頁。
注二五　前掲書（三八五頁）。
注二六　露英「賞めてやらざりしが口惜しく候」初出『手紙雑誌』明治三十七年三月二十六日（長谷川啓、黒澤亜里子監修『田村俊子全集』第一巻、ゆまに書房、二〇一二年八月）一〇七頁。
注二七　人に感染する不治の病にかかっていた咲子は、自分が

死なないと伯母が家に来ないことが分かったのである。

注二八　村上信彦は『大正期の職業婦人』（ドメス出版、一九八三年十一月、二二頁）において、次のように述べている。「明治期に女の職業がまだ特殊な目で見られていたことはすでにのべたとおりであるが、大正に入るとこの風潮は徐々に変わってきて、女の新しい生き方として認める気運が一方に生まれるようになってきた。これは明らかに資本主義の発達に伴って女の職業がいやおうなしに拡大され、かつては特殊だった就職者数が増大して社会的に無視することができなくなったためである」。

注二九　長谷川啓、黒澤亜里子監修『田村俊子全集』第五巻（ゆまに書房、二〇一三年二月九七、九七、一〇一頁）。

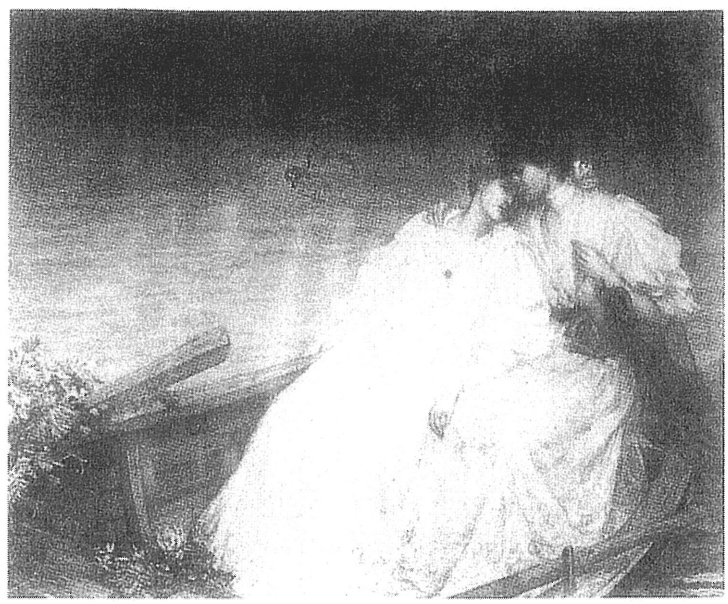
注三〇　前掲書（一〇一頁）。

注三一　池田功「日本近代文学と結核――負の青春文学の系譜――」（『明治大学人文科学研修所紀要』第五一冊、二〇〇二年、三頁）で次のように説明されている。「結核とは結核菌が体内に侵入し、ある種の病変をつくる慢性の伝染病の一つである。日本では漢方名の「労咳」と呼ばれていたが、それが肺に多く病変をつくったことから「肺病」と呼ばれるようになり、さらに病変の局所が結節をつくることから、現在の呼び方である「結核」となった。結核は古代の希臘から遺伝説と伝染説に分かられて病因が論争されてきたが、一八八二年（明治一五）ドイツ人細菌学者ロベルト・コッホが結核菌を発見することにより、伝染説に決着した。しかし結核を治すことのできる治療法はなかなか発見されなかった。一九四四年（昭和十九）アメリカ人のワクスマンが、土壌内から抗生物質のストレプトマイシンを発見し決定的な治療効果をもたらした。日本では一九四九年（昭和二四）アメリカから初めて二〇万本が輸入され、翌年から国内の製造が認可された。一九〇九年（明治四二）から結核死亡者数はずっと一〇万人の大台にあったが、一九五一年（昭和二六）にはそれを下回り下降線を描いて減ってゆき、結核は治る病となり、恐ろしいイメージは無くなっていった」。

注三二　福田眞人「結核の文学史序説――病の比較文化史的研究――」（『言語文化論集』、名古屋大学大学院国際言語文化研究科出版、二〇〇二年一一月　一三〇頁）によれば、森鷗外（一八六二―一九二二）、二葉亭四迷（一八六四―一九〇九）、若松賤子（一八六四―九六）、夏目漱石（一八六七―一九一六）、正岡子規（一八六七―一九〇二）、斎藤緑雨（一八六七―一九〇四）、国木田独歩（一八七一―一九〇八）、高山樗牛（一八七一―一九〇二）、樋口一葉（一八七二―九六）らが肺病で亡くなっている。

注三三　明治四四年から大正五にかけて、雑誌「青鞜」を出した女性文学者のグループ（平塚らいてう、伊藤野枝ら）

が中心となって提唱した、近代的自我に目覚めた進歩的女性のことであり、封建的な因襲を打破し、社会的にも家庭的にも、新しい地位を獲得しようとした女性である。

画一

ルイ・リデル「最後の花」（一九〇〇年）。ブラム・ダイクストラ『倒錯の偶像――世紀末幻想としての女性悪』富士川義之等共訳（パピルス出版、一九九四年四月）六二頁参照。